EVE～Anather Story～

神崎優希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＥＶＥ～Ａｎａｔｈｅｒ　Ｓｔｏｒｙ～

【Ｎコード】
Ｎ３２８６Ｄ

【作者名】
神崎優希

【あらすじ】
天城小次郎はいつものように有意義な…、有意義な時間に浸っていた。

序章（前書き）

人は夢を見る。
夢は昔のものとも未来のものとも言えないたわいもないものが殆どだ。

しかし、そのたわいもない夢は時として未来に警鐘を鳴らす。
アメリカには夢を登録するセンターがあるほどだ。
人の夢は時として先の事を知らず知らずに知らせてくれる。しかし、殆どの夢に意味がない。それが一般的な見解上の夢である。
人の願望が夢で具現かしただけ、取るに足らない一種の妄想。

一見なんの意味もなさそうでもあり、一つの閃きでもある

序章

誰もいない静かな埠頭の倉庫で、天城小次郎は一人高い天井に視線をなげうっていた。

倉庫とはいえここは立派な、そう立派な探偵事務所だ。

小次郎がこの人気のない事務所に移ってから二日目の夜である。
つい三日前まで、大手の桂木探偵事務所で意に反してはいたが所長代理として仕事をしていた。

それまで請けていた案件に全てかたを付け三日前に突如として辞表を提出し、予てより準備していたこの埠頭の倉庫に…もといあまぎ探偵事務所に移り住んだのだ。

何気なく付けたテレビには見馴れた男の映像が映し出されている。
その放送のテロップには『大手探偵事務所ー桂木源三郎所長内部告発にて逮捕』と活字が踊る。
小次郎は無意識にチャンネルを替えた。
「おやっさん…」

静かに息を吐き出し、もやもやとした気持ちを消そうとしたが、それは直ぐには消えそうにもなかった。
眠りにつこうとしたその時、『ピンポーン』チャイムがなった。
時刻は既に夜の１１時をまわっていた。
「こんな時間に客か？」
小次郎は体を起こすと直ぐに入り口に進んだ。
普段なら居留守なりする小次郎だが、今夜はどうも余計な事を考えてしまいそうだったからだ。

「いま開けるよ」
扉を開くと、目の前に一人の女性が帽子を深く被って立っていた。
「天城…小次郎さんでよかったのかしら？」
流暢な言葉遣いだが、イントネーションから相手が日本人でないことがわかる。
「どうぞ入って」
オレは一言そういうと中に招き入れた。
「そこのテーブルに居てくれ、オレがここの所長天城小次郎だが、あいにくといまはオレしかいないからコーヒーをいれてくる、あんたコーヒーは飲めるかい？紅茶もあるんだが…」
女性は
「コーヒーを」と短く答えると、イスに腰をかけた。
いかにも外人らしいセクシーな体つきだ。上から９２・８０…。
と、そんな場合じゃない、まずはコーヒーだな。オレはまた気持ちを変えてコーヒーを運んだ。
ちなみにこの『あまぎ探偵事務所』はオレ意外に職員はいない。
もとよりこうして事務所を構える予定にはしていたが、人を雇うつもりは全くなかった。
「どういった用件だ」
かなりの美女がこんな時間に人気のないない埠頭のしがない探偵事務所に来るなんて、余程の事だろう。
しかし一つ気にかかる。「私はメルビス・ソレンシア、オービエン製薬の社長秘書をしているわ、ここに来たのある方の紹介があったから、一流だと聞いているわ」

オービエン製薬は外資の製薬会社だ。
頭痛薬などの神経系の薬を得意分野とした最大手だな。
会社名を名乗ったことからすると社内での疑惑の捜査依頼か、他社のリサーチってのが依頼内容だろうが、こんな時間に来たんだ。
恐らく内部疑惑の調査の依頼だろう。

しかしオービエン製薬か…何かで耳にしたような気もするが…。

「2日前にうちが開発していた新薬が盗み出されました。犯行は外部犯によるものですが、足取りが全く掴めていません、恐らく相当に訓練された人間が2人、サイレンサー付きの銃で所員を撃って脅し、薬をとって逃げました」
サイレンサー付きの銃か…、何を使っていたかわかれば足取りを追えるかもしれないな。
二人組のプロか…。

情報屋に当たれば何か出て来るかもしれないな。
「ところでミス・メルビス」

「NO、ミセスと読んで頂けるかしら？ミスター天城」

「これは失礼、できれば襲撃にあったときの映像も見たいんだが…」

情報は少しでも多いほうがやりやすい、相手の特徴もつかめるし、何かと参考になる。
最近では日本も物騒になったもんだ。
銃を持った犯人が会社を襲撃。
トップニュースになりそうなところが全くもって耳にしていない…。

しかも案件をうちのような超マイナーな事務所に回してくるとは…。
いったいどいつの紹介なんだろうか…。

オレが独立したことをしる人間は極小数だ。
どうもくえない裏がありそうだ。
「それで、依頼料は？」
探偵の仕事に相場なんて有って無いようなもんだ、警察が相手にしない、もしくは介入出来ないような案件、クライアントの依頼は様々だ。
だから危険度は金額に比例するところがある。
内容を知っては後々断りづらくなるが、金額だけならなんとでも言える。外資ならある程度の金銭感覚も持ち合わせているだろう。サイレンサーの銃に、公表できない新薬が絡んでいる…。

一介の探偵にはまるで不向きな案件だ。
オレの腕を知っているなら、『桂木探偵事務所』のクライアントだったかもしれないな…。

いくら頭脳明晰なオレでも、担当していない事件までは覚えていない。
いくら『桂木探偵事務所』が大手でも、天城小次郎の名前はそんなに知れたものではだろう。
一時は所長代理をしていたとはいえ、知名度で言えば源三郎の娘で同じ所長代理を勤めていた『桂木弥生』のほうがよっぽど知られているだろう。
後は情報屋の線か…。
可能性としては1番高いだろうな。
もちつもたれつの商売だから、情報を買う側が自分の情報売られる事は有り得ない事ではない。
まあ、それで飯のタネが向こうから転がり込んで来てくれるなら願

ったり叶ったりだ。
「前金で３００万、成功報酬に７００万円。他にかかるようならその都度請求いただいて結構です。ただし、３日以内に薬をオービエン製薬に届けて頂きます。もしそれが不可能なら…つまり所在が掴めてもあなた方での回収が困難な場合には成功報酬１００万です。」
「いつかけていただいても構いませんが、あくまでもビジネスの携帯電話ですので意味もなく電話をしないで下さい。それから会社に来られる際は必ずお持ち下さい。ＩＤの代わりになりますからその携帯を照合板に当てれば各所のドアを通過できます」

メルビスが帰ると、オレは早速情報屋のところへ足を運んだ。
埠頭から少し走ったセントラルパークのバーで、グレンという黒人の情報屋と合流した。「へっへっへ、小次郎さんお久しぶりですね。聞いてますよ、しばらくお見えにならないと思ったらあまぎ探偵事務所をつくられたそうですね。花の一つもおくらねぇですいません」

グレンとは長い付き合いだ、こいつには貸しがあるから、いろいろな情報を手早く集めてくれる。
「よせ、お前に花を贈られても嬉しくない。それよりも調べはついたか？いまは噂程度で構わないが情報が欲しい」

ホテル地下一階のバーの奥座席に腰掛けオレはグレンに話しかけた。
このホテルは通常のホテルだが、浮気の待合にもよく使われるため、男一人でテーブルに着く客も多い。
オレも駆け出しの頃に何度かこのホテルで張り込みをしたことがある。

「オービエン製薬についてでしたね。たいした事は分かってません

が、国内よりも外国との取引に力を入れているようですね。扱っている薬は、神経系や精神安定剤がメインで、いずれも直接病院に卸してますね」

市販品は扱いがないのか、奪われたのは麻酔か安定剤の新薬だったんだろうか？

いずれにせよ、奪われた薬は口外できない一品らしいな。

「それで、オービエン製薬の開発していた薬については？」

「新薬はさっぱりわかりませんがね、会社の動向は少し掴めましたよ。今年の初めに新しい部署をつくって、そこへ中東のほうからわざわざ研究員を招き入れてますね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3286d/

EVE〜Anather Story〜

2010年10月9日23時55分発行